



干城録卷第二十八

部

石見守 辰部 正成 石見守 保長 五男

何賀者由緒書 辰部 正成 石見守 保長 五男 辰部 正成 石見守 保長 五男

四男久石五男正成 辰部 正成 石見守 保長 五男 辰部 正成 石見守 保長 五男

國朝大業廣記 父保長 辰部 正成 石見守 保長 五男

松平隱岐守書上 仔賀 辰部 正成 石見守 保長 五男

賀の忍ぶみの六十七人と率わく城内小

忍い入戦功と勳家らま家恩賞と

て清持禮とれ賜いらる貞享松平隠岐守書上
同松平家書上

賀者由
緒書永禄六年一向専修の徒叛さす時

正成と累代一向宗らりらまことと異

心ろくして忠節と頼ひ此年十月

針崎の逆徒等と和国の岩と懇せひ

久

東照宮自こまこと救はん一向せ終ふ

此と江蜂屋貞次と松平金助戦ひらる

ついに遂く貞次金助と突く首か

んとひ

東照宮清覧し給ひ貞次と叱し給ひ

貞次俯伏して逃さるんとひ正成ら

平岩親吉と是と逐ふ事急らり大正
川志

同十二年正月遠江國掛川の城攻くと正成

渡邊守綱内藤正成守多重次等と先

登小とくみ

松原自体の事録
渡邊守三河記

城と圍と攻撃ぬ

伊賀者
由緒書

敵敗北して退くと正成及び渡邊

守綱内藤正成跡と追て附入るなり

大志
川志

國朝人
業廣記

この以攻方と松尾口大鼓門の両口と攻

たりとまじく

大志
川志

敵城門と堅く戸さ

して守りしう六法方より得ひしと

ひろくわたり大鼓門のうらみと敵と

聲と挙て切と出るやうとくしり

乃まは六法方より引退く

大志川志
伊賀者由緒書

正成ハ

渡邊守綱高見彌平次等とひとく

踏止りて敵出るやと待たりしと退小

一人も出さざり乃まは六と収めて退れし

武徳大成記
大志川
伊賀者由緒書

同年三月再掛川と攻さ

せ給ひしと内藤信成守多重次神原

忠政等大将とて馳向ふ

貞享
守多書

正成ハ

柵の廻り番とて後邊守細卒多重
次等と日夜と爲してひかゝる攻とせ
たり伊東伝元龜元年姊川に役と正成粉
骨とて衆と等とて競ひ撃つま
ハ哉前ハ大軍遂と敗軍とたり四戰
同二年三方を役と供奉と先登と
て功と顯と四戰なり賀者由緒書とて戦ひ數刻小
して清方多く討死とる五

東照宮と今利ありと察と大
まひと収めるとして後と敵と數千
人跡と去るとして清方の備と迫るとま
正成及び久保忠隣菅沼定政等或騎馬
或歩行おと従ひ奉つと遂と濱松より
帰城するゆとせぬ川志此夜に戦功とよ
つと正成と二九とめとこれ嬉ひととら伐

賜ひ貞享松平德收守書一一同松平
秋中守書上賀賀者由緒書まの賀賀の國士

百五十人と預け給ふ賀者由緒書大抵より先武田

家へ間者外庵とくくるものと討留らるるに

彼ら推乃てつりつ相州廣正の懐劔とたぬ

ひ家まの清料の采配く清料とひ

さ織へ甲ふ星へ曹とくくたたまひ

らる貞享松平隠岐守書と同松平
就中守書と賀者由緒書天正二年九月武田

勝頼遠江國へ出陣くく此の

暴雨より天龍川溢まられば容易く涉

つらうく河原へ備て後瀬とく居

たりくに正成及び久保忠世後邊守細

村と勝重森川氏俊等とく二十人ふ

候とて出る甲陽軍鑑伊
賀者由緒書敵將板垣彌

次郎信通より者五騎とく

中の瀬と涉つるに正成及び村と勝重等

二十餘人馬と水中小乗いま逐撃く

涉つる得ひつて引くをり武徳編年集成六二
川志 賀者由緒書

かくて武田勢濱松の城下へ来りて

刈田せんく山縣昌景ら組小菅五郎玄清

元成と將くして山田豊後福嶋某玄黙

口より進みくく心成ハ森川氏俊等と

先登して遠と合せ遂く敵と迫りて

つ寛永森川藩伊賀者由緒書同二年四月麾下士大賀

彌四郎潛り勝頼小心とせ山田八藏重英

倉地平右衛門小菅基左衛門等とかくひ

逆謀と企てしに山田重英志とひるく

して奉れとぬと

東照宮小菅奉りくくやうく心平及

ひ濱邊守細今村勝長大岡清勝等命と蒙

つて彌四郎の家くくりてまこととて

勝頼ら書翰敷通とて採出して献せり

人三川志同七年九月岡崎三郎信康君清事あ

つて時心成仰とつけく天方山城守通興

二股城（三川志）の事

奉小禎りぬ（國朝之業廣記）三川志（信實者由信書）按之

此に記

東照宮より清書と信康君とまよひて

くははく見給ひて清書の次第

うけたゆりぬさるは正成通興と託ひへさ

事こぞあまじき清書はうら勝頼

小心とよせ逆意と後さる見あめ

いとおかけりて此事さるに偽らり

其餘のこころ何事とゆつさん

やとおかくに親と對し逆心とかまふと

あるはを死しての後さるらた

なまこの一事とい兩人よしく陳謝せよと

宣ひなまは正成通興その事いら小も言

よしてん清りるやとく思ひ給へ

ひたるよ再正成小宣ひたるは汝にこと

年頃のじつひ後うねい今介措せよと
ありらまというくくん正成前後代志
してまといあうくひまとい通興傍より
苦痛と見奉るまといまといくく今介
通興介措く奉るんといひく遂く活志
るくと賜りくくかて濱松くくより
東照宮の活前く伺候く仰かりまとい
ままとい活覚悟くく活介措と正成り

命せよまといくく通興やうく活介措く
奉りまといくく具さくく言くくめり
くく其頃通習の人くく活物くくより
活ひく時信康う正成く介措せよと命
せくく正成ハ鬼といくく勇士のまとい
まの首とい斬之くく聞さくく
あめくくのまといくく
神原氏日記徳川
傳後書(一)按く
るくく保家傳くくよりくく船中あくく活生言まといくく正成等ハ
二股城く入えひくくてま帰くくく載ひくくまより祥くくく

としと始く神原氏日記
徳川傳後書より

まより心成いとるる

幸しくおのひらん信康君の清為とて

寺と建之たりたり
何賀者
由緒書 同十年

五月

東照宮洛内外大坂堺よりと遊覧

信んと發駕したまふかくて堺と遊

覧昇つまき洛におもむらせ信んとか

くこと出させ信ひく心成と存多忠

勝酒井忠次後邊守細屋美勝右等数輩

と扈從く奉る志る小六月二日奉社寺

あり織田右府事ありく聞え乃且ハ

驚らせ信ひ今洛小くとも此小勢小

ハありくく潜く帰國有て後とも

かくと議く信んと宣ひく清馬と進

め信ひるる小宇治醍醐ハ敵中よりハ過

くかかんさくハ遠るりく何賀路伐

経ていふんとて郷民等小郷道守せよと
ていつてせ終ふ既く其月五日仔細賀の境
音聞味くいつり終ふ
大三川志 按とるべく貞
享仔細賀者書よといふ成栗
とくふる布く在つるとありて出されは仔細賀の白子まつて供
奉しつるなりこの神賞くして浪三貫目と賜ふといふせり
此くこ奉多忠勝正成小じうひ此國ハ正
成ら生國らまは其地のごぬちりたそん
小郷道守くたてまらまといひらるる
東照宮とる代同くしま小命あり

久やうく清先小進みく郷道守く奉
る大三川志 仔細
賀者由緒書かくて唐伏免と過させたま

ふ頃正成其地の郷士くじうひ我君今借
小洛より仔細賀路と経く帰くせ終ふ汝
等敬言衛くして忠節と盡せよといひられ
いやくく馳集りく郷道守く大三川志 同奉

七月

東照宮甲斐國ぶつらう八代郡柏坂はら際松ま下く

ることあり後入りこまじり先武川
 者ともう設置ありこまじり曾根村勝山の
 岩と正成と物頭とて伊賀の志と
 して守りせ給ふ國朝之業廣記大正成
 ことありて津金衆と牒合せと
 守り居あり國朝之業廣記甲斐國志 同年八月清方は
 玄信濃國佐久郡と岩とをか中へこ此邊
 一掛の岩と攻めんとせり正成伊賀に

ことと率わく江草の小屋小夜菟
 らせしに小尾監物祐光郷導して遂
 小屋と攻破す寛永小尾譜國朝之業廣記 此頃松平康親
 久澤基翁等と駿河伊豆兩國の境三枚橋
 城と守り居りて敵と三島小出強せ
 こと按て六松平康親領内穴倉の岩と

貞享年中書上り六伊豆國穴倉とありて北條家の岩とに
 ことと守り分正保の國圖とよとて駿河國徳倉村と城跡とあり
 つと是とありて穴倉と六伊豆國の穴倉と岩とありて
 と同名ありりことと守り穴倉と六伊豆國の穴倉と岩とありて

て北條家所持、かハ何處國よりワレん然まともみか何處とのみ
有る駿河國といふ事みえひ故くこころ國名と者注推めて
に似てきこもあつてく徳説と
奉る異同以辨んや 康親は田代右衛門

元次と遣りせしに心成しきり援將と

て彼地小いり九十餘騎あり是と守

つとと三嶋と出りて川田とるさ

心貞享松平國防守書と四、朝之業廣記と三川志かくて敵と倉の岩

と磐いし小卒多重次駿河國沼津よ

つと援來りて戦ひて敵力及びり

返ひと並山の外郭まきと逐撃と首

三十餘級と討とまよりまより心成は田

元次とかんまきと並山と出りて

川田とるさ其切いと多りりり寛永神尾

諸國朝之業廣記と三川志この頃ハ幸より心成と並

山にたさるところまきとる天神尾と

いふ岩と難り居る貞享松平國防守書と國朝之業廣記並山

小と出りて晝夜ハ働多り敵ハ岩

佐野小屋とてなる小九月八日の夜伊賀に
めの二人と名のひふいまたに此者具り
見と帰つともく貞享伊賀者書上やうく其月
十五日の夜夜うもりて遂小攻落し

りり

貞享伊賀者書上
國朝大業廣記

東照宮その功と賞し後以此岩堅固
小して信玄勝頼の二代もくさへ
遂に落さうつるとく宣ひあり貞享伊賀者書上

同十一年八月正成命とうけ伊賀者二
百人と率わく甲斐國郡内谷村の城と

守る

國朝大業廣記 六三
川志 甲斐國志

同十二年三月織田信雄

伊勢國松賀嶋城と攻撃し心澗川三郎
玄清雄利と率わく攻りまは城を小勢
小して防さうく辟易してそ見え
くはる澗川雄利とまことなる城をく
と速く帰降しとく喻くはまは

遂小坪とあけく選さるりやう信雄
此坪と澗川雄利と共日置入膳亮と接將
とくさるはまこ加勢と

東照宮とをまうつまうつ六命せう
まうつ正成伊賀者百人と率わく松賀
嶋と守る同川十五日豊后家麾下の將
蒲生氏郷織田信包等松賀嶋城と襲ふ
翌十六日寄りの名市中に放火し諸

士の居宅と追捕し外郭に迫る日置
入膳亮突く出陣の戦く敵は遂に
敵を頻り小攻よせし同川十八日ま
く入膳亮突くしつ續く正成も伊賀
の士と引率し坪外小血戦せり四月
廿八日にしつて既小四五十日あひこ驍
勇と奮く防戦しつるは寄りもか
く攻つるは和とるはせんをたり

〜に城中もよも云糧やうやくに盡〜

久心成等許容〜して和平成〜の之

人質こ〜う〜尾張國もを帰つ〜る因朝

大業廣記ス三川志）按々〜心成長久もは彼〜水井善
且後つ成願小言寛助を信等〜えうけ〜と長久もは信陣
物語〜長え〜心成は信願に賀嶋の松と守り〜長
久もは信願〜出〜平暇〜うり〜心成の子は心統
事〜う〜い〜不見かワ
心成得り〜〜 同年六月尾張國蟹

口の城と攻させ給ひ〜〜賀賀者とも

清先〜進み龍川一益う船とさ〜て人

數と城〜入〜も口あ〜丹伊直政ら

手れ者敵と迫合ら〜と賀賀のものど

も傍より押破り二の九ま〜攻入〜り

貞享年賀賀者書上 心成ハ長澤ハ者ともと車ハ九

と攻圍心武徳大威礼何賀者由緒書 同十四年真田昌幸

心愛せ〜時

東照宮甲斐國府中〜清旗と〜させ

給ひ〜〜心成賀賀のもの〜先〜

進み千塚とくさるゝ陣とらぬ貞享仔
賀者

書同十八年

東照宮小田原へ發向させたまふに

三月織田信雄と首將とて蒲生氏郷

細川忠興蜂須賀家政等並山崎之丞

正成も岡田元次ととも馳向て攻む

城將北條美濃守氏規力と盡て防戦

せし久諸將とらるゝと云と引んとせ

〜〜氏規とまこと逐撃正成元次ひ

〜〜と合せ十八町口あり力戦を

つゝ此時うち取首十八級あり寛永神
尾藩此頃

正成うさゝ物に黒地は四半と白く五文

字と出〜〜と

東照宮清使番の者とも指物とてた

まうんと思〜〜めさま本多正信とて

仰あつたりまは正成のまこと報る貞享松平隠
岐守書上候

賀者由
緒書

こまより加増の地と賜りしと

て八千石と知行し關東よりせ給

ひし後兵力の士三十騎伊賀の者二百人と

附屬せしむる伊賀者
由緒書文禄元年肥前國名

護屋より出陣し給ふとこい正成法炮

を奉りしよりし貞享伊達書
上宿徳集慶

長元年十一月十四日死せり法名と西念

とらふ伊賀者
由緒書よとく正成を生涯の戦功

多きところ中より永禄の牛久保小坂井去正

三年の長祿同九年高天神等の役數

後遣と合せありまことよりまは戦ひし

やありし人神谷仁助とてなる者と遣

と合せし突とありしに此遣は奉長祿

の役名護屋法陣のよとて

東照宮兩方まことよりせ給ひし其

遣法寛ししよりしとて貞享松平談
中寄書上心

成あるゝと命と夢の事一時ハ二人と
斬らるゝ彼者としら跡先とたきやうて
あやうらうと振うらうさま跡うらうのと
斬あせうと後と先うらうのと斬らるゝ
よゝとととと成常とと用意あり
て寝るゝとととととととととととととと
あゝととととととととととととととととと
せまゝととととととととととととととととと

結つてさるゝハ事ありととととととととと
らるゝ故らうととととととととととととと
ととととととととととととととととととと
蹴るゝととととととととととととととととと
石見守正就マサユキハととととととととととととと
とととととととととととととととととととと
ゆゝら五千石と知行と三千石ハ弟
正重ととととととととととととととととと

伊賀者
由緒書

慶長五年上杉

景勝と征伐の事あり進發し終ふに
正就小軒卒百人と預けし先鋒は後
炮頭とる事あり三三川志かくて六月十八日石
部小着清ありは是ハ長束正家水口城
に在る郷食膳と敵しんと復くする小
おふししやありはん夜とありし潜
小出清し終ふ正就は後邊守細水野正重
等後炮小火とつけ警衛し水口河

原に押出一回水口河所と馳通る板垣ト
麻呂書
まより日と厚く豫倉し着せし事あり
此夜ハ八幡別當の家し止宿し終ふ此頃
右田原備前守晴清居城右田原に在り
るとこまは接ふとて命たまふ
こより皆川山城守と共小正成先筒の接
炮百挺と預けし事あり右田原之部三三川志
かくて下野國小山の清陣しむら

くるる石田成遂謀ひてす之はれ
 八軍とう之をせ終りんと議し終ひ此年
 七月景勝の壓へんとして結城を康卿に
 惣大将とらふまじ陸奥出羽常陸小徳等
 八國を以て守衛せしめんと置まじたるに就
 八国部内膳正長盛と従ひ伊賀甲賀の
 者二百人と率して白河境黒羽根の
 城を籠る

貞享年興平美他守書に「廣長見聞書」大三
 川志の「城」云々「廣長見聞書」に「い」云

より「さ」に就同部内膳正長盛と黒羽根と守りて
 せまう「後」に「移」景勝佐竹義宣の御へして守部宮城
 小籠ると見え「さ」れと云三川志「よ」る「先」黒羽
 根城と守りて「八」波部市郎右衛門保英の事なり「の」
 ころ正就は太田原「あ」りて守部宮と守りて
 思ふ小廣長見聞書に「此」尚徳と誤り「さ」う云

同年八

月敵城白川のつゝめとうかりんとく
 志ハく那須の者と違ひくくる小遂く
 一人「さ」か「り」来「て」ひ「く」あ「や」く「れ」
 正就「ら」し「者」三人「ら」り「出」せ「し」小「や」りて
 此者「帰」つ「て」来「て」彼城とぬらん事いと安

うもへて先く遣へつる那須の者とも
いみれ白川城はふすの小礫小かけくたひ
ありつとく物語りたまひに就長盛事の
さゆと秀康卿小若たてまつりかたさうい
いつる事一ことさうありさやく白川城
と攻させ給へくまうりくまきしと秀康
卿許言らるべき言白川と取らうとこと上
方有利らるる人亦益らる其形勢小從

ひそののちともうくむ計りてんと
善く給へく遂く其事止つらる

了貞享仁賀者書上因朝
大業廣記大三川志 同十年二月

台徳院殿清上洛川とれ清孫炮奉り
して供奉廣女見聞
孫景紙 そのとく一に就り
あるまひひてより恣しして細子
ぬのともくさうひ意くそむく
ぬの川俸とともめらるるたまひ事

出来て二百人ほどの後黨を率へて
まづ出らるゝ正統もうまてつゝ横河
と強訴しつゝ正統を平生の形勢
かゝるにまづつゝ細子ゆめの成
めを放さるゝまじく其内十人の者と撰り
まし頭を對し荒涼に働らりしとて殊
せりぬくまゝに二人其場を逃
去りて幸徳うゝるりつゝ

正統は逃ぐるゝめのと深く悪み已り従
士に命じて探りめしめらるゝ一日
正統は門前と彼一人通行しとて告る者
ありつゝまづやうに馳出まじと討捨け
まじしこゝ其者まゝあはれにて伊ふ
忠政ら僕らりつゝ正統人違はり
忠政小陳謝しつゝまじし白晝に
見違ふゝとやうりつゝ許さる

まゝ衆人傳へ聞て此頃過切の事類
くやまひ正統横さぬのふる海ひるま
はうのこの過切も正統うらんとの
しつと河ひく其疑ひさへ通ましう
く先く事出来くいまく多く日も
経さるゝかゝるあさゆき事志出
くさるゝとあるまゝさあるまひか
つとまゝ此年十二月米地と収せ

是松平隠岐守定勝うめとくめ

預けく

廣長見聞書大三川正信賀者由緒書、按て
るく創業記考異官中當代記等く過期の

事正統うめとくめく顯りまゝ改易せまゝとあるも
ハ疎漏く出さるゝとやわらんまゝと按とまゝと家譜く
ハ廣長五年故わくく信勤氣どかりあり松平定勝り
めく預けくまゝとあるとくまゝと十年信上洛く供奉
せくまゝハ廣長見聞書紙下載くまゝハ今い
まゝに廣長見聞書信賀者由緒書くまゝとく 元和

元年大坂再乱れこれ正統いりく先
ハ罪と贖りんと思ひ構へ先子ハ將上
總々忠輝君ハ陣下くりり

按てまゝとく
去屋知貞ハ

記く 台徳院政供奉けりし清光法炮取部
石見とあるはらの正統の事とや
五月七日

れ戦ひし天王寺口小く奮戦し遂

小討死ししなり 貞享松平隠岐守書
上佐賀者由緒書 其子武部

正幸源右衛門正成王膳正治等ことに

父討死せしと云ふにけりし

久是より松平越中守定綱のりし小

巻のまじりて遂に彼家臣とありし 家譜

伊豆守正重キリシタン石見守正成キリシタン二男あり

とてめ長をまじりて藏しし父の遺跡

けりし三千石と云ふ賜りし

東照宮の清傍小近侍 佐賀者
由緒書 慶長五

年関原の役小九月十四日正重と清前小

めし汝父祖數を戦功あり汝もまじ

年若くしてこのたひに戰場小ありし

はけかけの事あり構へし危き働し

へりしと懇の仰ありし清盛と云ふ